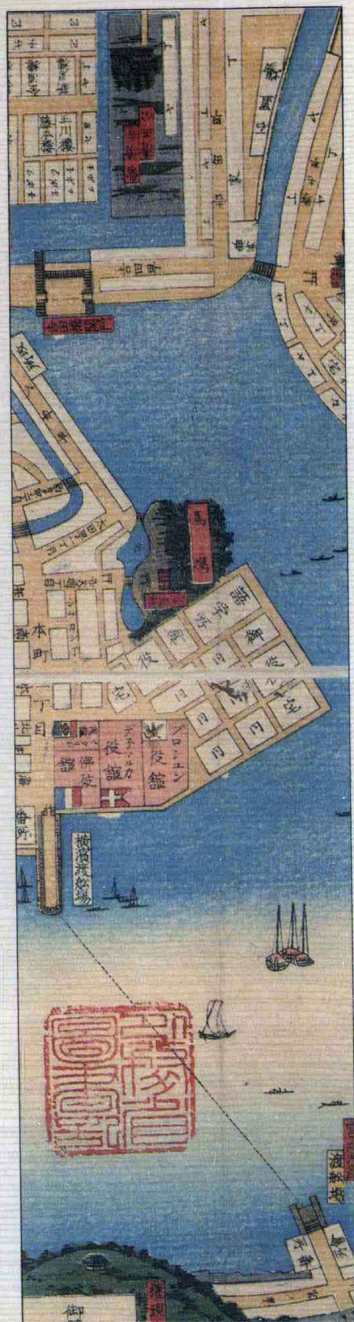


司馬遼太郎

街道をゆく 十二



街道をゆく

二十一

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十八年五月三十日 第一刷発行

街道をゆく 二十一

定価 一〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五―三―二
電話 ○三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八三年

0326-254961-0042
Printed in Japan

街道をゆく

二十一

本書には「週刊朝日」昭和五十四年七月二十日号・連載第四百四回から十月十二日号・第四百十六回までと、昭和五十七年十月十五日号・第五百五十七回から十二月二十四・三十一日号・第五百六十七回分までを合わせて収録。

目次

芸備の道

安芸門徒

7

三業惑乱

19

川と里

31

町役場

45

元就の枯骨

59

猿掛城の女人

73

西浦の里
高林坊
三次へ
水辺の民
岩脇古墳
鉄穴流し
鳳源寺
神戸散歩
居留地
布引の水

201 185 171 157 143 129 115 101 87

生 田 川

217

陳徳仁氏の館長室

231

西洋佳人の墓

247

青丘文庫

261

横浜散歩

吉田橋のほとり

277

語学所跡

291

海と煉瓦

307

路傍の大砲

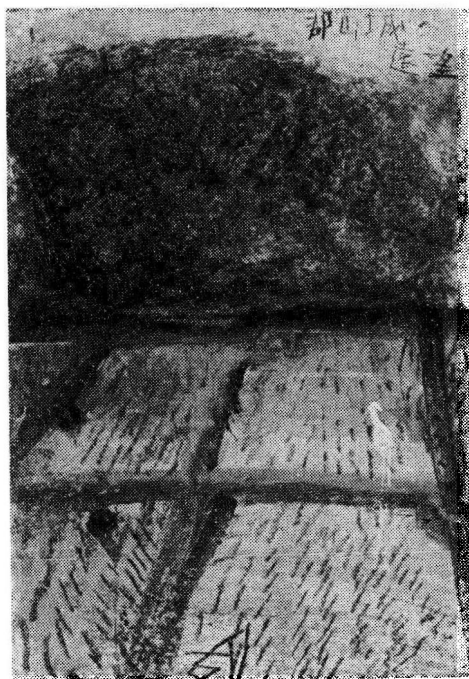
321

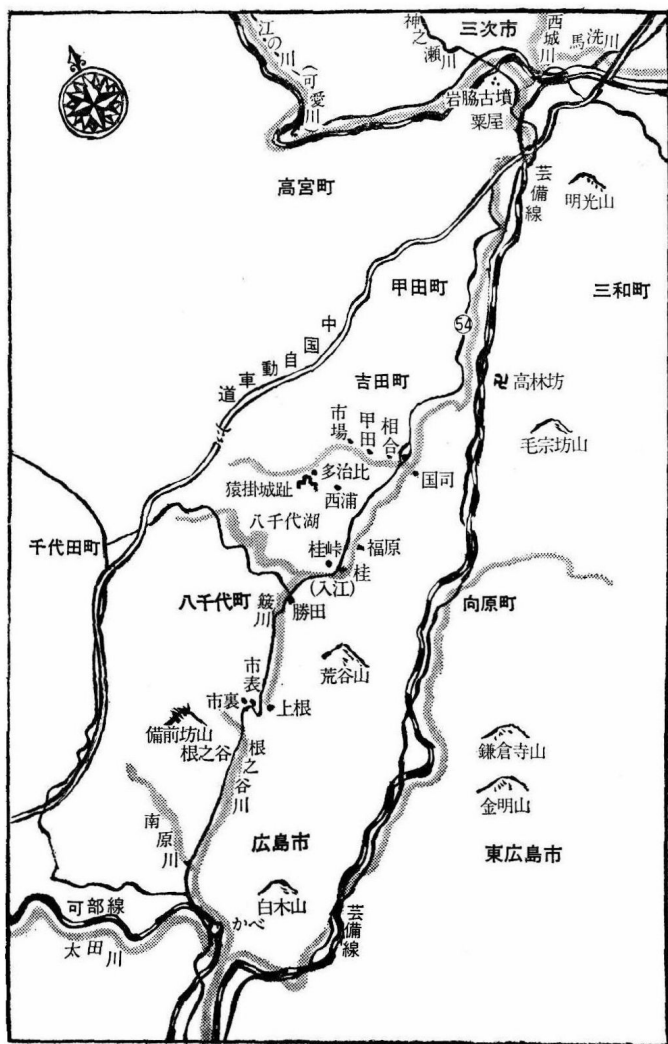
光と影

335

題字 〓 棟方志功
え 〓 須田 剋太
装幀 〓 原 弘
地図 〓 熊谷博人

安^あ
藝^ぎ
門徒
芸備の道
一





広島県は、旧分国ぶんこくの国名でいえば安芸あきと備後びんごとから成っている。

「中国者ちゅうごくものの律義りちぎ」

などと、戦国時代、京都あたりではいわれた。中国者というのは、概して聡明だが機鋒きほうをおもてに出すことなく、どこかおっとりしている。外交上、約束したことはかならずまもる、という印象であつたろう。むろん中国者のなかにその例外が無数に在るにしても、そういう印象を領域外のひとびとに持たしたというのは容易なことではない。

この場合の中国者とは、山陰・山陽十数カ国のすべてに対していつたのではなく、具体的には毛利氏のことをいったかとおもえる。とすればその勢力の根拠地の安芸のことであり、次いで備後のことにちがいない。

安芸の風土をおもうとき、つかぶのは、

「安芸門徒もんて」

ということであろう。とくに国名をつけてよばれてきたゆゆしさを思わねばならない。

室町期から戦国にかけて形成されてゆく親鸞しんらんの教徒いっしゅう（一向宗・本願寺宗・浄土真宗）は、他宗とちがう点がある。浄土思想によってひとびとに安心あんじんをあたえるだけでなく、日常のくらしかたまでを規律的にしたことである。さらに副次的には世間に対する姿勢まで自力じりき雑行的な増上慢ぞうじょうまんをいやしんだことは、門徒の浮世での挙措動作を多少は美的に——ひかえめに——するといふ

こともあったかと思える。私の印象としては、そうである。

もっとも私は戦国末期の一向門徒がすきだから、右の歴史感覚にはすこしえこひいきが入っているかもしれない。

禅宗は枯山水かれさんすいの庭園や五山文学をのこしたが、一向宗はそういう芸術的なものはほとんどのこさなかった。むしろ民俗的なものを消したほうが多いかもしれない。たとえば極端に迷信を排斥したため、この宗旨がさかんだった地方には民話がほとんど残っていない。民話の多くが狐狸とか亡霊とかいわゆる怪力乱神かいりきらんしんにかかわりがあり、そういう迷信を真宗が積極的に排除したためであった。この点、柳田民俗学の立場からいえば、功罪の罪とはいえないが多少のさびしさがある。

安芸や備後には、大ざっぱにいえば以上のような風土的特徴がある。

さらにいえば、戦国期に真宗のさかえた地方というのは、比較的ゆたかだったということもいえるかもしれない。

ふつう他宗の寺院経済は、地頭などの寄進になる土地山林をもつことによって——地主になることによって——成立しているのだが、当時の真宗は土地山林などの寺領をもたず、門徒たちの信心こそ領地りやうでん（福田）であるとした。このため門徒たちが金穀をもち寄って寺院を建て、維

持した。以下のことはむろん統計にはないが、戦国期に一つの集落^{あざ}四、五十戸程度が一カ寺をたてていたのではないかとおもわれる。多少のゆたかさがなければ、こういうことはできない。安芸以外の他の地方の例でいえば加賀の国は室町期にきかんに新田開発^{しんでん}がおこなわれ、その結果、小地主が無数にでき、この上に真宗がのつかった。加賀は加賀門徒とよばれるようになったが、ついには、

「穫れた米を領主におさめるより寺におさめたい」

という気分がおこり、ついには門徒と地侍^{ぢざむらい}が協力して鎌倉以来の守護大名である富樫^{とがし}氏をたおし、一種の共和制を布^しいた。この状態が百年ほどつづいている。

自立の精神が旺盛になったかれらは大名によるおさえつけの支配と収奪をきらい、織田氏が勢力をのばしてきたときも、これに対してはげしく抵抗した。

東海地方の三河門徒にいたっては、若いころの徳川家康を追い出そうとしてついに戦いをはじめ、家康の家臣団の半分が門徒側に味方するしまつだった。伊勢門徒も長島の低湿地にあつまって織田氏の勢力の侵入をこぼみ、大虐殺をうけている。

これらナニナニ門徒とよばれる地方は、そのはげしきの現象を、宗旨の面からみるよりも、農村が前時代にくらべ経済的にも政治的にも成長し、門徒寺^{もんどうでら}を核にして自立的に結集できるところまできていたという面から見ると、真宗は多分に触媒的なものであった。

「主従はたかが一世^{いっせい}だけの——この世だけの——契りではないか。そこへゆくと阿弥陀如来は未来永劫に頼むべきものである」

というのは、三河門徒が、若い家康に抗したときのことばとされる。このことは、阿弥陀如来にアクセントを置くこともできるが、一方、自立して専門的な武装勢力とたたかえるようになったという農村の自信に力点^{りきてん}をおくこともできる。

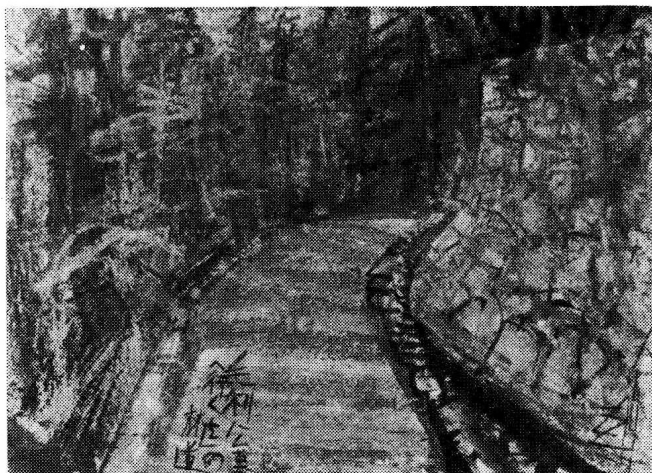
これらの諸現象からいえば安芸門徒はすこし例外的であった。かれらは単なる「固門徒^{かたもんど}」ではなく、江戸期には本山の教学を純化させたほどの思想的な活動力ももっていたが、戦国時代に地方領主とあらそったというただけだけの経験をほとんどもない。

その理由はよくわからない。

まだ安芸の農村がそこまで経済的に成長していなかったか——具体的にいえば加賀のように新田小地主^{しんでん}がひしめきあって出ているという現象がなかったか——それとも領主側が、土をつきやぶって出てくる筈^{たけのこ}のような門徒のエネルギーをうまく飼いならしたのか、すくなくとも後者については注目していいかもしれない。

具体的にいえば、毛利氏の内政能力の高さである。

元来、戦国の領主として、真宗門徒ほど気味のわるいものはなかったのではないか。



かれら門徒は、村落ごとに講をもち、たがいに身分のかかわりなく「御同朋、御同行」おんどうぼう おんどうぎょうとして横につながり、結束していた。他家や他領の門徒とも、当然ながら連絡をもっている。しかも所属する主君または領主とはべつに信仰上の主人をもつ。上方にある本願寺である。

領主にとって、こんないやなものはないであろう。

げんに薩摩島津氏にあっては「念仏停止」ねんぶつちようじということで真宗を禁じてきた。それでもひそかに信仰する者がいて、しばしば腥惨な弾圧がおこなわれた。江戸期の薩摩藩では切支丹キリシタンと同罪であり、それでもなお信仰をすてず、秘密で法義の会合をもったりする者は「かくれ門徒」とよばれた。その秘儀についての伝承は、いまでも鹿児島県大口市あたりにはのこっている。

——天皇と神はどちらがえらいか。

というばかげた質問をすることによってクリスチャンをいじめたりするやり方は昭和十年代の軍部にもあったから、右のことはむかし話ではない。

さらにいえば神道でまつた靖国神社を、民間の宗教法人であることから国家へうつそうとする暴挙が企てられている。近代というのはひとびとがもつさまざまな価値観を容認する社会のことで、明治的国家神道というひとつの信仰形態にすぎないものを、ひとびとの税金で運営されている国家に移そうなどというのは、中世末期の封建領主の思想とかわらない。

江戸期の安芸門徒の教学思想はその純粹指向の点でやかましいものであった。

門徒たちがその家々にうっかりまつていた神棚を、十八世紀後半、芸轍げいてつ、慧雲えうんなどという教学思想家の運動によってとりはらってしまった。また毎年伊勢神宮からくばられてくる大麻たいま（神符）も拒否した。

おもいついたままを書くが、加賀、越前、三河、播磨、安芸など、戦国末期の国々で武威を張った門徒は、在郷の地侍の子が真宗僧になり、郎党がその門徒になるというぐあい、兵農不分離時代の武装者（武士）であった。